近代作家と『今昔物語集』

――芥川の取材作品を中心に――

藤本徳明

一

芥川竜之介には、『今昔物語集』に取材した作品が多数存在することはよく知られている。長野甞一氏の『古典と近代作家』などによって見れば、主なものとして、次のような諸作品があげられる。作品名の下に初出年次、その下に、主な典拠説話の『今昔物語集』（『今昔』と略称）における説話番号も示しておく。

第一表

「青年と死」（大正3）（四―二四）
「羅生門」（大正4）（二九―一八）
「鼻」（大正4）（二八―二〇）
「芋粥」（大正5）（二六―一七）
「運」（大正6）（一六―三三）
「偸盗」（大正6）（二九―三）
「往生絵巻」（大正10）（一九―一四）
「好色」（大正10）（三〇―一）
「藪の中」（大正11）（二九―三三）
「六の宮の姫君」（大正11）（一九―五）
「尼提」（大正14）（三―二一）

これら作品と、『今昔』原話との比較研究については、前掲長野氏の論著などに詳述されており、改めてこれに付け加えうる所は少いであろう。

ただ、私は、別に『今昔』と近代日本文学との関連について、自分なりの調査検討を試みたことがある。[注1] その結果、先に表示した『今昔』の諸説話について、芥川以外にも、多くの近代作家たちが、小説や戯曲などへの創作化の試みを行っていることを知ることができた。次に芥川の取材した『今昔』の説話で、他作家によっても取材されている説話と、それら取材作品との関連状況を、管見に入った範囲内で表示してみたい。本論では、当初、それらの説話と作品との関連を全体にわたって検討する予定であったが、紙幅その他の都合から、本論ではさしあたり、〈極限状況下におけるエロス〉とでもいうべきモチーフにおいて共通する、「青年と死」「偸盗」「好色」「藪の中」の四作品とその原話、そしてそれら原話に取材した諸作品にのみ論及を限定することにしたので、表ではそれら四話と、別の説話群とに分け、それぞれは、取材芥川作品の発表順に掲げることにした。

第二表

①「竜樹俗時作隠形薬語」（四―二四）
②「青年と死」（大正3）芥川竜之介
③「竜樹菩薩」（大正10？）室生犀星
④「不被知人女盗人語」（二九―三）

⑤「偷盗」（大正6）芥川竜之介
⑥「半蔀女」（昭和22）海音寺潮五郎
⑦「まぼろしの琴」（昭和29）海音寺潮五郎
⑧「女強盗」（昭和22）菊池寛
⑨「鳴弦の賊」（昭和41）新田次郎
⑩「親鸞」（昭和44）丹羽文雄
⑪「妖かし」（昭和52）矢代静一
⑫「平定文仮借本院侍従語」（三〇―一）
⑬「好色」（大正10）芥川竜之介
⑭「平仲」（昭和22）菊池寛
⑮「少将滋幹の母」（昭和25）谷崎潤一郎
⑩「親鸞」（昭和44）丹羽文雄
⑯「具妻行丹波国男於大江山被縛語」（二九―二三）
⑰「藪の中」（大正11）芥川竜之介
⑱「街道の厄難」（昭和22）菊池寛
⑲「羅生門（シナリオ）」（昭和25）黒沢明・橋本忍
⑳「大江山」（昭和30）海音寺潮五郎
㉑「大江山の哄笑――酒呑童子異聞」（昭和48）童門冬二

*

㉒「羅城門登上層見死人盗人語」（二九―一八）
㉓「羅生門」（大正4）芥川竜之介
㉔「髪」（昭和47）杉本苑子
⑩「親鸞」（昭和44）丹羽文雄
㉕「利仁将軍若時従京敦賀将行五位語」（二六―一七）
㉖「芋粥」（大正5）芥川竜之介
㉗「五位の休日」（昭和47）杉本苑子
㉘「讃岐国多度郡五位聞法即出語」（一九―一四）
㉙「往生絵巻」（大正10）芥川竜之介
㉚「極楽急行」（昭和29）海音寺潮五郎
㉛「白い蓮」（昭和47）杉本苑子
㉜「六宮姫君夫出家語」（一九―五）
㉝「六の宮の姫君」（大正11）芥川竜之介
㉞「六宮姫君」（昭和23）菊池寛
㉟「風のかたみ」（昭和42）福永武彦
⑦「まぼろしの琴」（昭和29）海音寺潮五郎

近代文学における『今昔』発見の流れの中で、芥川の果した役割の先駆性と、その意義の大きさについては、改めて贅言するまでもあるまい。そして、芥川が、発見し、作品化した『今昔』説話のほとんどが、一千話に余る『今昔』の説話群全体の中でも、ことに、文学性ゆたかで興味深いものであったことについても、さして異論はないものと思われる。

なお、第二表で示した、芥川以後の諸作家にして、彼らのとり上げた説話をすでに芥川が取材している事実を知らなかった人は、ほとんどなかったと思われる。にもかかわらず、先表が示すように、八編の説話については、管見に入っただけでも、芥川以後の作家が二十件以上にわたって取材していることは、なかなか興味深い事実である。

この事実は様々な解釈を可能とするものである。それら説話が、再取材、再々取材に耐えうる素材としての興味深さをそなえたものであったとみることもできるし、そうした説話に最初に着眼した芥川の目利きの鋭さに、重ねて敬服することもできる。さらに、いわば再挑戦を公然と試みた芥川以後の作家たちの、なみなみならぬ文学的意欲のごときものをくみとることもできよう。

そうした古典の原作と、近代における第一発見者の作品、そして、それへの、いわば再挑戦者たちの作品とを比較してゆくならば、古典や伝統と、近代文学との交渉、あるいは、近代作家間の同一主題をめぐる微妙な個性差や葛藤、さらに、いわゆる主題学（テマトロジー）

の恰好の検討素材といった、興味深い様々の文学的問題点を、それらの中に見出だすこともできるはずである。

本論では、そうした観点に立って、先述したような理由から、第二表中、作品番号①から㉑に至る作品群について、素材たる『今昔』の原話と、主にそれに取材した芥川の作品、および同じ説話に取材したと思われる他作家の作品の相互関係を比較検討してゆくこととしたい。

ただし、『今昔』と芥川作品の関係については、先掲の長野氏をはじめとする諸先学の業績も多いことであるから、主に、芥川の作品と、それ以後の近代作家の作品との対照に焦点をあててゆくことになろう。

なお、本稿で論及しえなかった第二表中の②～㉟および⑦の作品とその原話については、「近代作家と『今昔物語集』続考」なる別論において論及するので、参看頂ければ幸いである。

二

芥川竜之介②「青年と死」は、大正三年九月「新思潮」に発表された戯曲である。作品末尾に、「竜樹菩薩に関する俗伝より」と記されていることからも、古伝を創作化したものであることは明らかだ。そのうち陸続と『今昔』に取材した作品を発表していることから、①『今昔』四―二四「竜樹俗時作隠形薬語」に材を得た可能性はすこぶる高い。

他方、室生犀星③「竜樹菩薩」は、非凡閣刊犀星全集中の「史実小説集」と題された巻に掲載されているが、初出は分明でない。「史実小説集」の掲載順序からみて、大正十年から十一年ごろの作と推測される。犀星と芥川の間柄からして、芥川の一連の『今昔』取材作品に何らかの影響を受けたものとみても不自然ではあるまい。

竜樹隠形伝説は、竜樹が八宗の祖とされ、たとえば、浄土真宗では七高僧の第一に列せられていることからみて、芥川が記すように、『今昔』以外の「俗伝」としても広く流布したことはたしかである。後述するように、犀星の作は『今昔』の伝承とやや異なるので、仏教の盛んな金沢の、しかも寺院に育った犀星が、『今昔』以外の説教等からの「俗説」に拠った可能性も、否定することはできない。

①②③共に、竜樹が、隠形の薬を用いて身を隠し、悪友らと共に、国王の後宮に忍び込み、后妃たちを犯したという大筋においては共通している。

いわばSF的な発想と、エロティシズムの匂いの濃い話題であり、若い日の芥川や犀星が、心ひかれたのも故なしとしない奇異な伝承ではある。しかし、芥川は、②をその短編集に収めることはしなかったし、犀星も、③を非凡閣版全集には収めたが、先述したように、初出も分明でなく、没後の新潮社版全集にも所載されてはいない。共に、習作的な匂いが強く、快心の作とは言えないもののようなのである。が、そうした作品にこそ、逆に、作者の意図せざる個性のごときものが、あらわに出ている場合もありそうに思われる。

それぞれの内容だが、①はまず、竜樹と二人の友人とが、外道の典籍を学び、隠形の薬を作ったとする。「寄生を五寸に切って、陰干に百日干して」作る薬としているのは古拙な味わいがあり、むろん②③には製法など言及されることはない。次いで三人は、国王の後宮に忍び入り、后妃たちを犯すのだが、后妃らは恐じ怖れて、「近来形は不見ぬ者の寄り来て触れはなむ有る」と王に告げる。②③でも、女たちはおびえはしているが、②では喜び待つ者もおり、③では事を王に告げようとしないあたり、②③の作者らの近代的な性意識や対王権感覚を、そこに見ることもできそうである。王は、隠形の者の仕業と見て、宮中に粉をまき、足跡の見えた所を、兵士らに太刀で切らせる。二人までは切り殺されたが、竜樹は、后の御裳の裾を引きかぶって必死に祈る。そのせいか、二人の死体発見で殺戮は終り、竜樹は、「外法は益なし」と考え、発心出家したとしている。

②の「青年の死」だが、およその経緯は、宦官たちによって語られる。何十人もの后が身重となったので、対策として砂をまくことを宦官が提案する。次いでAB二人の青年（すなわち、忍び男たち――「竜樹」という名は用いられない）が対話、「ウパニシャッド」や「唯一実在」といったことばのまじる哲学論義をかわす。問答のあと、ふたりは、

姿の見えなくなるマントルを着て姿を消す。やがて、多勢の裸女たちのたむろする後宮の場面となり、隠形の男たちのことを語りあって「早く来ればいいのにさ」とか「私はただ男に可哀がられるのが好き」といわせているせりふにも、后妃らの王に対する貞操観念を重視しているふしのあった『今昔』との差が見られることは先言した通りである。そののち兵士らが登場、ＡＢは死の神と語りあうが、皮肉にも、死を退けるＢが殺され、死を恐れぬＡが命を全うするところで幕となるのは、いかにも芥川らしい、逆説的結末といえよう。

③の「竜樹菩薩」は三章から成る。第一章では印度拘薩羅の王宮と、そこに召された処女たちの姿態が濃艶に描かれる。不明の原因により身ごもった女たちのおののきと、それを裸体にして打首にする王の怒り。第二章では、評議の結果、王宮に白砂をまき、宮中を切りまわることが提案される。第三章で、四人の足跡が発見され、三人までは切り殺される。残る一人は王の背後で、からくも命をつなぎ、のちに発心して竜樹菩薩となる。

①②③を比較して、まず目立つのは、隠形の者らの人数が、①は三人、②は二人、③は四人と異なっていることである。

芥川が二人にしたのは、ＡＢの思想的対立を劇的に描きたかったためと思われる。犀星が侵入者を四人にした点は伝承的に興味深い。すなわち、『今昔』では、砂をまくのが王の発案、侵入者も三人であり、竜樹が命を全うしたのは后の御裳に逃れたためとしているが、『法苑珠林』『三国伝記』では、砂をまくのが、臣下の提案、侵入者は四人、命助かったのは、王の背後にあったためとしており、『今昔』系伝承と三点で異なっている。そして、犀星作はすべて『法苑珠林』『三国伝記』系になっているのである。その意味では、この「竜樹菩薩」は、『今昔』取材作でない可能性の方が強いと言えるかもしれない。

②の結末が、生残ったＡに「夜明だ。己と一緒に大きな世界へ来るがいい」と何者かが語りかける、思想劇としてのむすびとなっているのに対し、③では「間もなく王宮を逃れ出た竜樹大士は、はじめて発心したと云はれてゐる――。」と発心談のスタイルを保っているのも、仏教界経由の口承説話あたりに、③の根がありうることを示唆するものかもしれない。

しかし、外形は発心説話にかりつつも、③を描いた犀星の関心の中心が、一種異様なエロティシズムのようなものにあったらしいことは、次のような描写に見てとることもできるのではないだろうか。

その大浴室の噴水を真中にした多くの処女だちは、さまざまな形態と香気とを殆毎夜のごとく擅にしてゐた。あるものは人魚のやうなうねりを肢体に、蒼茫とした月光の陰影の間に泳ぎ澄み、あるものは、したしたと四散する噴水に打たれたまま、その軽羅をもう一枚皮膚の上からうっすりとへばりつかしてゐた。

官能的で粘着力のある筆致だが、その処女たちが妊娠したことを知られるや「裸体にして打首」にされ、「美しい露はな女体は、おのおの腹部に蠢平として動くものを最後まで動かしながら、恒河の沼深いほとりに、下人の手によって取棄てられた」し、鳥獣がその死体を「群れ啄いた」とする描写などには、ある種のサディスティックともいうる志向すらのぞいていそうに思われる。

その志向は、これと近い時期に書かれた犀星の「性に眼覚める頃」の中の「性欲的な昂奮と発作」や「快い惨虐な場面」といったことばで示されている陰微な心意とも遠くないものであったろうことをも想像させるものである。

一方、芥川作品は、三好行雄氏のことばをかりれば、「終末を見てしまった青年」を主人公とした、「あらわな観念の図形」[注2]のえがかれた劇であり、これまた芥川文学のライト・モチーフを早い時期に形象しえたものでもあった。

知性的で神経質な芥川と、官能的で生命力にあふれた犀星という、二人の文学的親友の資質の差が、両者の若書きになる、竜樹をめぐる習作の中に、すでに原型として表われていることが、なかなか興味深く思われるのである。

三

『今昔』二九―三「不被知人女盗人語」は、『今昔』全編千余編の中でも、すこぶる評価の高い異色説話である。

長野甞一氏は「全編の中でも屈指有数の傑作」[注3]としているし、小島政二郎氏も本編を紹介したあと、「未だかつて人間の欲望を、本能を、これほど瞬がずに直視し、これほど広汎にわたって有るがままに把握した作家が我国にいるだろうか。いや、世界にいるだろうか」[注4]とまで絶讃している。

はじめに、この説話④二九―三の内容を一見しておこう。

年三十ほどの赤ひげの侍が、とある通りを夕ぐれ方に過ぎたとき、半蔀のかげから鼠鳴きをして彼を呼びとめた者がいる。

見れば年二十あまりの美女。ためらうところもなく二人は共寝し、情痴にただれた日々がつづく。

やがて彼女は男装して、男をしばり、むち打つという異様なふるまいに出るのだが、女の色香におぼれた男には、それも快楽となる。

そうした倒錯の快楽によって女に呪縛された男は、今は盗賊団の首領と知れた女の言うままに、盗賊団の先頭に立って悪事を重ねるに至る。が、時あって女の挙動に悲しげなものの目立ったある日、突然彼女は姿をくらまし、二人の愛の巣だった家まで、原形もとどめず解体されてしまっていたのであった。

まことに奇怪でありながら、人間の深層心理の暗がりを見事にえぐる秀作として、多くの作家たちが、『今昔』の中で、この説話に関心を寄せたこともゆえなしとしないのである。

そして、この説話についても、最初の発見者は芥川竜之介であり、彼の⑤「偸盗」の中で取材されることとなる。「偸盗」は大正六年四月と七月、二回に分けて「中央公論」に掲載されたもの。その内容は、太郎と次郎の兄弟が主人公格であり、ふたりながら盗賊団の活動家である。が一味の女頭目である美女沙金に共に思いを寄せているため、しだいに反目が深まる。一味が、藤判官の家を襲った夜、次郎は猛犬の群れに囲まれ危機に陥る。それを見た太郎は、一旦は恋敵である弟を見捨てようとしたが、結局肉親愛にひかされ、次郎を救う。翌日、沙金の死体が発見されるが、太郎・次郎の兄弟の手にかかったものと伝えられる、という大筋である。

盗賊団の首領が若い美女であり、男らをその性的魅力で統率、襲撃に際しては入念な事前調査を行う。そうした設定において、これが④二九―三の話と骨格を等しくしていることは明らかであろう。

次いで、この説話を小説化したのは海音寺潮五郎であり、⑥「半蔀女」という題名自体が④冒頭の叙述をふまえていることを物語っている。「オール読物」昭和二十二年五月号に発表された。

⑥は、参議藤原玄忠という人物の視点から描かれており、④の「赤ひげ」にあたるのは、玄忠の家人で、下野出身の侍那須貞高という若者である。永く行方不明になっていた貞高が久しぶりに玄忠の下に姿を見せたので、事情を問いただすと、まさに④で描かれたような事情で、女盗と同棲していたことを貞高は告白する。

さて、玄忠は、次の除目で中納言に昇進すべく工作していたのだが、これまで太宰の大弐であった人物が、中納言と検非違使とを兼ねる破格の出世をとげ、玄忠の野心はついえる。が、驚くべきは、風でかいま見られたその新検非違使の美しい北の方こそは、貞高の証言によれば、かのふしぎな女盗人だったのである。

法の元締たる検非違使の妻が女賊という事実を知ってこおどりした玄忠は、さっそく新検非違使の失脚を画策する。が、自分の女への愛さえもが、貴族らの地位争いの道具に使われようとしていると気づいた貞高は、「京はおそろしき所に候」と書きおきして郷里に姿を消す。

女盗人の正体を貴人の妻に想定、事態を貴族の地位争いにからめた点は、海音寺の工夫である。海音寺は、この④の話によほど心ひかれたと見えて、⑦「まぼろしの琴」でも、女を王の姫君に見立て、関東武士との恋物語に仕立てているし、「芦刈」という作品でも「赤ひげ」

の盗賊を登場させている。

同じころ、④の説話を紹介したのは芥川の親友菊池寛だが、それは昭和二十二年六月から「新大阪新聞」に連載した「好色物語」の一節、⑧「女強盗」においてであった。

この「好色物語」中には『今昔』から二十話以上の説話が紹介されているが、いずれも創作というより、現代語訳、せいぜい評釈というべきもので、その点で⑧も、⑤や⑥とは趣を異にしている。

格別④の話と異同する点はないので、ここでは内容紹介は略しておきたい。

次いで新田次郎が⑨「鳴弦の賊」で、④を小説化しているのに注目したい。昭和四十一年四月「小説現代」に発表されたものである。

この小説は、『今昔』作者にしばしば擬せられる源隆国を主人公としている点で興味深い。

さる公卿の邸に泊っていた隆国は、小柄な黒装束の男のかき鳴らす弓弦の音に指揮される盗賊団に襲われ、どうにか逃れることができた。隆国の使う小者阿加丸――「赤ひげ」のせいであろう――が、その盗賊団の頭を知っていた。阿加丸の告白の内容は、④の『今昔』の話とほぼ同じで、彼が赤ひげ、頭が女賊に相当する。ただ、彼が、盗賊団に入った動機が、腹一杯芋がゆがたべたいということであったのは、芥川の「芋粥」――その原典二六――一七をふまえたものであることは明らかである。

隆国は、阿加丸の話を聞く中で、その頭の女の母が、昔の隆国の愛人であったことを知る。ただ、その愛人が、隆国にサディスティックな交情を迫ったため、結果的には女を捨てた――　どうやら、その復讐を彼女らは企てているらしいと知り、慄然とする。

彼は阿加丸に命じ、彼の昔日の不信のふるまいに対する遺憾の意を盗賊らに伝えると、復讐の追跡は止む。

隆国は、阿加丸らに物語らせつつ、著作の仕事に没頭する。

その書き出しは「今は昔、いづれのほどのことにかありけむ、侍のほどなりける者の、誰とは知らず、年三十ばかりにて、長すはやかにて少し赤鬚なる、ありけり」というのであり、この⑨「鳴弦の賊」は④『今昔』（二九―三）の物語がいかにして書かれたかという物語、いわば物語の物語、小説の小説である点にユニークな個性を持っているとも言えそうである。

丹羽文雄の⑩「親鸞」と、矢代静一の⑪「妖かし」もやはり④を素材としているのだが、浄土真宗の開祖親鸞を描いた、みずからも真宗寺院の子弟でもあった丹羽の⑩と、カソリック作家矢代の⑪とが、共通して、『今昔』における最も強烈な悪とエロスの説話を創作化している事実は、宗教文学史的にも興味深い事実だといえそうである。

丹羽文雄の⑩「親鸞」は、昭和四十年九月より四十四年三月まで「サンケイ新聞」に連載され、昭和四十八年、著者によって定本とされた新版でも、B6版二段組千二百頁をこす大河小説である。そのあとがきに、次のように述べているあたり、丹羽文学にとってこの小説の占める意義の大きさが知れるであろう。

> いまにして私は、親鸞を教祖とする浄土真宗の末寺に生れたことを、しみじみありがたいと思う。親鸞のようなひとにめぐり会えたことは、一介の文学者としても、人間としても、生涯のよろこびである。ここに辿りつくまでに私は、生家の寺をとび出し、宗教はじゃまだと思い上り、さんざん道草をくってきたが、「疑謗を縁とせよ」と、親鸞はとうの昔に私のような小ざかしい人間を見透していたのである。[注5]

その大河小説の第一章の題名が「今昔物語」というのであり、「年のころ三十ばかりの、背の高い、赤髭の、見るからに岩乗そうな男が、とある町を歩いていた」と、まさに④の話題に始まっている。そして、奇妙な愛欲によって女と結ばれ盗賊となった男が、最後は、女に捨てられ、家はこわされ、孤独にかえるという点も同じである。

面白いのは、そのこわされた家の隣家の子に、赤ひげが次のようにたずねているところである。

「知らないか。となりの家がどうなったか」と、となりの子は、ゆうべ大勢のひとがこわしているような物音がしていたと答えるのだが、その子こそ、親鸞の幼い日の姿だったとしているのである。

この赤ひげは、のちに羅生門で、死体の髪をぬく老婆に出あったりするのだが、ここでも芥川が「羅生門」として小説化した『今昔』二九―一八の話題が利用されており、全巻で二十数話に及ぶ『今昔』説話に、丹羽「親鸞」は取材している。その冒頭に先の④の話が用いられ、しかもその女賊の隣家に親鸞の生家を持って来たことは単なる偶然とは思われないのである。

一方、矢代静一の⑪「妖かし」にも、④の説話の投影を見ることができる。

「妖かし」は昭和五十二年十月「文芸」に発表され、翌年二、三月に劇団民芸によって上演された戯曲である。

盗賊黄金丸は、首領石榴と共に都を荒しまわる盗賊団の実力者。豪家の召使女浜木綿に情を通じ、その手引で、豪家を襲うことに成功する。それと知っても、浜木綿の黄金丸に対する愛は変らない。そうした純真な愛を嫌悪する黄金丸は、実は男装の女であった石榴と、浜木綿の面前で情を交し、あまつさえ、部下の荒くれ男たちに命じて、浜木綿を犯させる。そんな非条理な悪虐の中で、かつては稚な子のごとくであった浜木綿は、一転して怨念と憎悪の権化と化し、ついには食人鬼とまで化すというおどろおどろしいドラマである。

しかし「はまゆうは、悪を行なうことによって、善をなしたのだ」という劇中のせりふに、作者の宗教的意図はのぞいているといえよう。

男装して盗賊団の首領となっている女石榴や、彼女と黄金丸とをつなぐ、鞭打ち、打たれるという奇妙な快楽（ただし「妖かし」では男が女を鞭打っている）といったモチーフに④の影響が見られることは確かである。

ここで、④の原話と、⑤⑥⑧⑨⑩⑪の取材作品との簡単な比較を試みておきたい。

まず、芥川の⑤と、④の決定的な差異は、原話に存したマゾヒズムの要素が、ほぼ完全に欠落していることであろう。沙金は、たしかに、驕慢な女としては描かれているが、それだけにとどまっていたのでは、④の男女間をつないでいた、神秘にして異常な性のきずなは感じとれず、そのせいもあって、ヒロインの妖しい魅力は十分描けてはいない。芥川自身、失敗作あるいは未完成作として、作品集に収めなかったのも、理由あることなのであった。時代の制約もあり、作者の個性にもそぐわなかった、異常すぎる説話への、成功せざる挑戦であったとも言えるだろうか。

⑥は女盗賊を貴人の妻とすることで、神秘な魅力を持たせようとしており、その点では成功しているが、やはり、これだけの素材は、真正面から取り組むべきものであり、一貴族の猟官運動の素材にまで倭小化されたことには不満が残るように思われる。なお、玄忠に「こんなくさりきった世の中がそういつまでもつづくものでなく、今になんとか変るべきはずだとは、いつも考えている」と思わせているあたり、軍部の横暴から占領軍の横暴へと、歴史小説家としての受難の日々を送りつつあった昭和二十二年当時の海音寺自身の感懐も反映されていそうである。角川文庫本「王朝」のあとがきで「自由主義の本家づらしているアメリカ占領軍が、かつての日本軍部同様の言論抑圧をこととしていた」と書いているような事情が、その辺に反映していたのであろう。

⑧は先述した通り、全く内容紹介に終始している。しかし、これを「こちたき近代的解釈など、往時の夢といわんばかりの作者のゆるがぬ無表情に私は偉大な凡人の辿りついた心境のエッセンスを見る思いがするのである」[注6]とする平野謙のような見方もありうることは付言しておきたい。

⑨の発想はなかなかに新鮮である。『今昔』については、作者像は今なお分明でないのだが、ありうる一つの作者像として、隆国と、サディスティックな女賊（この性的偏向は、⑨によれば、母子相伝のもののようだが）との関わりを軸としてとらえたこの小説は、多くの

『今昔』取材作品中の異色をなすものであろう。

⑩で、大河小説「親鸞」の冒頭に、④の説話を、丹羽文雄が置いたことは、きわめて象徴的なことのように思われる。親鸞は、愛欲の問題を、日本仏教史の高僧たちの中で、最も深刻に追求し、悪人往生の教義を確立したひとの一人であり、丹羽もまた、寺門の生家を捨て、おびただしい情痴小説を書きつづけた作家である。そして④の説話も、まさに、愛の倒錯が聖性に連りうる機微をえぐった秀作である。三者の接点は信仰とエロス、聖と悪の極限における合一をめざす志向にある、とでも言えようか。これは、単なる古典と伝統の関連の中の一現象であるよりも、日本思想史のライト・モチーフの一つをなすものとさえ言えなくもないのである。

⑪も、⑩で言及したようなモチーフを共有していることは明らかだ。先にも引いた「悪を行なうことによって、善をなしたのだ」とか「天が、はまゆうを鬼にしたのは、あわれみの心からだ」とかのせりふがそれを暗示する。しかもこれらのせりふを述べるのが、浄土教の高僧源信を彷彿させる源心という名の僧であるところにも、カソリック作家矢代静一の悪の救済を問う問題意識のごときものが投影しているようにも思われるのである。

以上、とりどりに個性ある作家たちによる、すぐれた④の現代文学化の試みを眺めてきたが、そのいずれもなお、④二九―三の原話自体のもつ異様な衝迫力には及んでいないように思われる。この辺の謎を解明することも、『今昔』と近代の関連を探求してゆく上での、今後の興味深い課題でありえよう。[注7]

四

⑫『今昔』三〇―一「平定文仮借本院侍従語」は、あまり上品とは言えないが、奇妙な味をもつ話題を含んでいる。平安時代きってのプレイ・ボーイ平中こと平定文は、女性に仮借してかなえられぬことがないという人気者であったが、ただひとり、藤原時平に仕える本院の侍従という美女のみは、終始平中を翻弄、彼の申し出をうけ入れようとしなかった。それで「此の人、此く微妙く可咲くとも、筥に為入られむ物（糞）は、我等と同様にこそ有らめ。それを騒涼などして見てば、思ひ被疎なむ」と決心、問題の筥をある日奪い取ったが、侍従はいつ、平中の企てに感づいたのか、筥には糞ではなく、香木が入っていたのであった。平中は、相手のあまりの心ばせに、いよいよ思いがつのって「悩ける程に死にけり」と結んでいる話である。

これも、芥川竜之介⑬「好色」に取材されているが、この作品は、冒頭に、『宇治拾遺物語』や『今昔物語』『十訓抄』の関係部分を題辞ふうに記し、一種の種明かしをしていることが目立つ。大正十年十月「改造」に発表されたものである。内容は⑫で紹介したものとほとんど変らないが、平中を「わたしの Don Juan」としてその「画像」を描いたり、平中の友人二人に「好色問答」をさせて、芥川一流の人生観や女性観を展開させている点が新工夫と言えようか。

菊池寛は、先出の「好色物語」中⑭「平仲」の項で、この話をとり上げている。例によって現代語訳したものである。

ちなみに、丹羽文雄も先出⑩の「親鸞」でこの話題に言及しているが、これは親鸞幼時の京洛がいかに不潔であったかを物語る資料の一つとして記されているにとどまる。

この話題を好んで扱った高名な文学者は谷崎潤一郎である。⑮「少将滋幹の母」でふれているし、「乱菊物語」の中でも言及しているからである。⑮は昭和二十四年十一月から二十五年三月まで「毎日新聞」に連載されたもの「乱菊物語」は、昭和五年三月から九月まで「朝日新聞」に連載されたものである。

⑮は周知のごとく、『今昔』二二―八「時平大臣取国経大納言妻語」で扱われた話題を骨格としており、平中はこの時平の遊び友だちとして登場、問題の本院侍従は、国経の妻とならんで、平中の二人の思い人のひとりとして扱われる。結果は、知られているように、国経妻は、時平のあざといやり口で老いた夫の手元から奪われたし、侍従もまた、平中を散々もてあそび、先の不浄の事件の後にも災いが重なって、平中

は「悩み死に、死んでしまった」としている。なお、谷崎は、侍従もまた、時平に横取りされたのだという『十訓抄』の説を紹介、元来、侍従は時平邸の仕え人である以上、「時平が手を着けていなかったはずはなく」、あの不浄の一件等も、時平の入れ智慧であったかもしれないとし、「そうだとすれば、平中を殺したのは時平であるということにもなる」としているが、なかなか、うがった見方のように思われる。平面的な男女関係にとどまらぬ、権力者の悪意のごときものをも視野にとり入れた、見通しの広さと深さとが感じられる見方だからである。「乱菊物語」では、同一話題ながら、平中と侍従の話としては描かれていない。

ところで、この不浄の件に極限化された、平中と侍従との間の関わりと、その破局の扱い方にも、芥川の⑬、菊池の⑭、丹羽の⑩、谷崎の⑮のそれぞれのすぐれた作家たちの個性の差は微妙に表われているようである。

まず、⑫での平中は「悩ける程に死にけり」で終っているのだが、⑬では、平中に「侍従！お前は平中を殺したぞ！」と叫ばせ、「「仏倒しに倒れてしまった」とし、「半死の瞳の中には、紫摩金の円光にとりまかれた儘、嫣然と彼にほほ笑みかけた侍従の姿を浮べながら……。」としている。死んだことは明言されていない。この末尾に「香木の糞の皆後に、美の世界、〈芸術の王国〉がみえた」のだとする海老井英次氏の見方は首肯さるべきであろう。[注8]

⑭で菊池は、「今は死ぬばかりに恋しく思ったが、どうにもならなかった。平中は、到頭この女に、完全にしてやられたのである」としている。死んだとはしていない。この程度のことで死ぬのは肯けないという、常識家菊池らしい受けとめ方であると思われる。

丹羽は⑩では、「いみじくも平中の心を見抜いた侍従の君の機智にたけたしわざであった。侍従の君の清筥の匂いを嗅いでから、平中はどこへ行っても色事に成功をせず、とうとうそれが原因となって、悩み死をしたという」と書く。この事件が死因でなく、この事件以来「色事に成功」しなくなったことが死因だとみるのは、情痴文学に長いキャリアをもつ丹羽らしい合理化であろう。

谷崎も⑮で、この事件を直接の死因とは見ていない。この事件以来色事に「失敗つづき」だったとするのは、丹羽の見方の先蹤だが、他の面で丹羽とはやや異なる。「まして侍従の君はますます驕慢、残酷になり、彼が熱を上げれば上げるほど冷かな仕打をし、もう少しという所へ来ては突っ放すので、可哀そうな平中は、とうとうそれが原因で病気になり、悩み死にに死んでしまった」としているのである。驕慢な美女に虐待されることに倒錯した陶酔を覚える男というのは、出世作「刺青」以来の谷崎が酷愛するパターンだが、そういうパターンの中の死を、あえて色好み平中の死とむすびつけている趣向は、まさに谷崎独自のものである。

なお、他作に比べても谷崎の不浄事件の描写は詳密だが、ここにも谷崎独特の性向が反映していることは確かだ。「悪魔」や「武州公秘話」「過酸化マンガン水の夢」などに、谷崎の汚物嗜好（スカトロジー）は隠見しているし、この⑮「少将滋幹の母」自体にも、妻を奪われた国経老人が、妻を断念すべく、路傍の死体に向って不浄観を行ずる印象的な場面がある。スカトロジー、あるいは不浄の美学というべきもの、および、マゾヒズムの心理学において、優雅な「少将滋幹の母」の中にも、谷崎の特異な深層心理は、見事なその芸術的表現を見出だしているといえるのである。

五

⑯『今昔』二九―二三「具妻行丹波国男於大江山被縛語」は、芥川竜之介の⑰「藪の中」に取材されることによって著名になった説話である。もとより、⑰「藪の中」は、⑯の説話のみを素材とするものではなく、欧米文学の諸編――フランス十三世紀の物語「ポンチュー伯の娘」、ブラウニングの「指輪と本」、アンブローズ・ビアス「月光の道」などの影響を受けていることが、比較文学的視座からも指摘されている。[注9]また、『今昔』と「藪の中」の比較自体、吉田精一氏、長

野芹一氏らによって緻密になされている[注10]から、本稿では、目的とする他作家の作品との比較に必要な限りにおいてのみ、⑯⑰について、最小限の瞥見を加えておくこととしたい。

⑯の説話は、妻を具して、丹波の国へおもむいた京の男が、途中出あった若い男に気を許し、弓矢と大刀を、欲張って交換したために、相手に弓矢でおどされ、木にしばられ、眼前で妻を強姦され、馬を奪って逃げられたという話である。

⑰の小説は、大正十一年一月「新潮」に発表された。ここでは、京の男は、死体となって発見される。これをめぐって、木こり、旅法師、放免、男の妻の母が、検非違使に問われるが、それらによると、侍武弘と妻真砂が、多襄丸という有名な賊に襲われ、夫が殺され、妻が行方不明となったという事件らしい。ところが、多襄丸の白状によれば、女を犯し夫を殺したのは事実だが、男の死は、女の願いにより、男同志が決闘をした結果の殺人だという。次に真砂の告白によると、多襄丸に犯されたあとの夫の眼が、あまりにも冷たい蔑みと憎しみにみちていたので心中を図ったものだが、自分は死に切る力がなかったのだということになる。最後に、武弘の霊の語る所では、多襄丸は、真砂を犯したあと巧みに口説き、女もそれに応じた。しかも女は、「あの人を殺して下さい」と自分を指したので、多襄丸も愛想を尽かしたようであった。妻は姿をくらまし、賊も去り、自分は妻の落した小刀で自刃し、中有の闇に沈むこととなった、というのである。

⑯と⑰の最も根本的な差異は、⑯で殺されていない夫が、⑰では殺され――あるいは自殺し、⑯の賊は、盗みが主目的で、強姦は副次的なものだったのに対し、⑰ではそれが逆転していることであろう。両者相まって、⑯の、いわば三面記事的事件が、⑰の、人間性をめぐる深刻な悲劇に高められており、今日でも、当事者たちのまちまちの言い分がからんで実態の不分明な事件が「藪の中」としばしば俗称されるという、いわば一種の典型にまで高めえた、芥川の創作抜法の卓抜さを見落すことはできない。吉田精一氏が、「古典の現代化の一つの極地」[注11]と呼び、中村光夫氏が「芥川のものでも出色の作品」[注12]としているように、この小説の評価は、芥川の『今昔』取材作中でも、最も高いものがあると言ってもよい。

⑯では、夫の面前で強姦された妻が、その原因は夫の油断にあったとして、「汝が心言ふ甲斐無し」と叱りつけており、作者もまた、盗賊が、妻の衣までは奪わなかったことを「糸恥かし」と賞め、逆に、夫の無警戒ぶりを「糸墓なし」とののしっている。これはまことに、『今昔』的という他ないドライな人間観であり貞操観であるが、⑰の方では、人妻の貞操は死を賭しても守られるべきだという芥川の生きていた大正期の貞操観が反映していて、あのむざんな悲劇となったものであり、⑯と鋭い対照をなしていることも、すでにしばしば指摘されている。

そうした意味で面白いのは、すでに何度もとり上げた菊池寛「好色物語」で、⑱「街道の厄難」での扱い方である。ほぼ忠実な現代語訳で紹介したあと、友人芥川の⑰「藪の中」の話もとり上げ、次のように述べているものである。

芥川は異常な不幸に逢った男女の心境を中心にして、三通りの事件（夫、妻、多襄丸の言い分による各事件＝引用者注）を想像したのである。ところが、原作では妻はそれほど責任を感じてゐないのである。凡てを良人の責任として、良人を非難しているのである。……

かう考へて見ると、平安時代の方が、女がずーっと威張ってゐたのである。結婚生活も女性中心であったやうに、女性の権利も強かったのである。

これは菊池の視点からの、芥川作品に対する陽気な批評とも見られるところであり、合理的思考者菊池の人柄と共に、「好色物語」が発表された昭和二十二年当時の、婦人の権利意識向上の趨勢も反映しているようであるのが興味深いところである。

ところで、社会的話題を呼んだ点では、日本映画としてはじめて、

国際的映画賞を得た黒沢明監督の映画「羅生門」の⑲シナリオも、見逃しがたいものであろう。知られているように、これは「藪の中」を映画化したものであり、当然⑯の説話を近代作品化した系列に入るべきものである。映画は昭和二十五年に上映され、翌年ベネチア映画祭でグランプリを得たものである。

大筋は、⑰の作品と同じなのだが、注目すべきは、そのラスト・シーンである。これまで悪事に加担していた杣売りが、羅生門に捨てられていた赤子をやさしく抱き上げ、家で育てようとするのである。それまでのいきさつを見て人間不信におちいっていた旅の法師がそこで「おぬしのおかげで私は人を信じて行く事ができそうだ」とつぶやき、その杣売りらに「夕陽がサッと射してくる」という所でこのシナリオは結ばれている。[注13]ここには、黒沢明独自のヒューマニズムが見事に投影しているといえる。

岩崎昶氏によれば、このシナリオは元来、無名のシナリオ・ライター橋本忍が、黒沢明の所へこれをもちこみ、黒沢は橋本と共同で改稿する中で、前述の結末を付け加えたものだという。[注14]⑯の説話の受容史の中での、注目すべきバリエィションの一つといえそうである。

なお、この映画がグラン・プリを得た背景として、一九五〇年代の世界の文化的状況としての、国際的な価値基準の喪失、混迷の状況があり、それが「真実はわからない」とする「羅生門」のライト・モチーフに共感しえたからではないかという見方を岩崎氏が示しているこ[注15]とも付言しておきたい。

次に海音寺潮五郎による⑳「大江山」に目をうつしたい。昭和三十年「探偵実話」に発表されたものである。

これはほぼ⑯の説話と同じ展開をしている。ただし、夫はさる廷臣の家臣だったが、女出入りから主君のきげんをそこねて追放され、そのため、妻からあしざまにののしられながら旅をつづける所であったと事情がくわしく説明されている。この夫婦が途中出あった男は、他の作の扱い方と異なり貧相な小男、だからかえって夫も油断をしたのであり、小男が夫をだまして弓矢と刀を交換するプロセスも、すこぶる念入りに書きこまれていて説得力がある。

賊による妻の暴行場面は省筆しているのは海音寺らしい節度であろう。

ただし、そのあと、妻がさらに口やかましく男をののしる点は『今昔』以上である。末尾の、妻に頬を打たれて、「夫は、世界中で今の自分が一番ばかげた顔をしていることを知っていたが、やはりにやにやと笑っていた」としているのは、『今昔』原文の「男我れにも非ぬ顔つきして有」を、翻案したものであろうか。

すでに芥川のころとは異なり、夫の面前で強姦された妻が、逆に夫の無力を非難するという反応のありうる時代――戦後も十年を経た昭和三十年代の、たとえば「恐妻」ということばが流行語となりえた時代相が、[注16]この、海音寺のこの説話への扱い方と関連しているようにも思われるのである。

最後に、童門冬二の㉑「大江山の哄笑――酒呑童子異聞」に目をとめたい。これは、昭和四十八年五月「歴史読本」に発表されたもので、ちなみにこの月の特集題名は「鬼と英雄の伝説」というものである。

サブ・タイトルが示すように、大江山に巣くう酒呑童子や茨木童子ら鬼どもが主人公で、前者は叡山の下級僧出身、後者は被差別地域たる散所出身で、現世の秩序に反撥、強盗・殺人・強姦をこととする〈鬼〉となった者共である。⑯の話は、その一味の一人星熊が目撃したエピソード、として語られるのだが、「大したはじらいもなく女は衣類を自ら剝いだ。その衣類を含にして、星熊は女と肌を合せた。それなりの応えかたが女にはたしかにあった、と星熊は思っている。その間、男は目をとじもせず、星熊と妻の姿をみつめていた」と、従来の諸作より、さらに夫婦の貞操観念を薄れさせていることが注目される。「何か虚しくなった星熊は、男も女も衣類もそのままにして去ってきた」と、一種のニヒリズムで味付けされている点も新しい。なお、⑯の話が大江山を舞台としていたことに着目、大江山の酒呑童子伝説と組み合せた趣向にも新味があり、被差別階層たる鬼たちの道理と、武

士の道理との対立をテーマとした点にも、現代性が感じられる。作者童門が、『美濃部都政十二年』の近著も示すように、都庁職員として、美濃部革新都政とされるもののブレーンのひとりでもあったことも、こうしたテーマのとらえ方と、なにがしかの関連はありそうにも思われる。

おわりに

総括的な結論は、冒頭にも記したように、第二表中㉒～㉟の諸作品の比較分析を終えたところで述べることにしたいが、①～㉑の諸編は、原典となった①④⑫⑯が、特異なエロティシズムに溢れた興味深い説話であるだけに、それに取材した諸作家の作品も、それぞれの個性のフィルターを通して、いずれも印象的な作品に仕上げられているといえよう。

また、これらを通覧しただけでも、一つの古典説話が、それをとり上げる近代作家たちの個性や、執筆時の、文化的・社会的状況等をも反映して、多彩な解釈や、作品化をもたらしている様相は、十分確認されえたように思われる。

大方の好意あるご批正を得て、今後も『今昔』を中心とした、古典と近代文学の関連についての検討をさらに進めることができれば幸いだと考えているものである。[注17]

注1　①「近代文学と『今昔物語集』との関連――取材作品覚え書」（昭54・3「金沢美術工芸大学学報」第23号）
②「近代文学と『今昔物語』」（昭54・10『図説日本の古典――今昔物語』集英社刊）
③「現代女流作家と『今昔物語集』」近刊「金沢大学語学・文学研究」第10号）
④「近代作家と『今昔物語集』続考」近刊「説話・物語論集」第8号）

注2　「小説家の誕生」（『芥川竜之介論』）。なお成稿後、岩倉政治「竜樹」という作品の存在も知った。

注3　『今昔物語集の鑑賞と批評』

注4　『わが古典鑑賞』

注5　『新版・親鸞』下巻。四十四年刊の五巻本『親鸞』のあとがきを再録したものであり、作者の意にかなったあとがきなのであろう。

注6　『現代文学大系・菊池寛・広津和郎集』（筑摩書房刊）解説。

注7　この問題については、拙論「今昔物語集の信仰とエロス」（「中日新聞」昭54・2・1）でも、ふれたことがある。なお成稿後、高木卓「妖しの女賊」（「歴史読本」昭37・9）という④（二九―三話）取材作の存在を知ったが、主人公「能勢丸」（④の赤ひげ）が、犯行中殺されるという結末以外は、ほぼ④話の内容と同じであった。また、⑤「偸盗」を映画化した「美女と盗賊」（昭30・木村恵吾監督）という映画もあるが、後述「羅生門」ほどの意義は認めがたいので、シナリオとの対比は省略した。

注8　「芥川文学作品論事典」中「好色」の項（昭54・2「別冊国文学・芥川竜之介必携」）

注9　『日本文学研究資料叢書・芥川竜之介』Ⅰ・Ⅱや『比較文学研究・芥川竜之介』等による。

注10　吉田氏『現代文学と古典』や長野氏『古典と近代作家――芥川竜之介』など。

注11　吉田氏前掲書。

注12　「『藪の中』から」（昭和40・6「すばる」）

注13　『日本シナリオ大系』第二巻所収「羅生門」による。なお、「羅生門」をアレンジした脚本に青江舜二郎「新羅生門」というのがある由だが未見である。

注14・15　「黒沢明の世界」（昭45・3「世界の映画作家・黒沢明」）

注16　「恐妻病」ということばが、昭和二十七年の流行語とされている。（「現代用語の基礎知識」昭和五十年版）

注17　古典と近代文学との関連を問うてきた主な拙論には、先掲のものの他にも、次のようなものがあり、併せて参看頂ければ幸いである。
①『日本海のロマン――伝承・文学にたどる北陸史』（昭51・中日新聞本社刊）
②「愛の修羅たち――文学にみる悪女の系譜」（「いしかわ」に昭52・11より昭54・6まで連載）
③「ほくりく物語絵巻――歴史小説の主人公」（「北国新聞」に昭54・10・2より連載中）

④「浦島伝説と近代文学」（昭53・3「金沢美術工芸大学学報」）
⑤「お市の方の愛と死――戦国の伝承と近代小説」（『今昔物語集――説話文学の世界第一集』昭53・笠間書院刊）
⑥「白い地母神――『雪霊記事』と『雪国』」（『雪と文学』昭54・日本文学風土学会刊）
⑦「母胎のロマン――鏡花文学における聖界」（『日本文学研究資料叢書・泉鏡花』近刊・有精堂）

なお、引用の諸文献の他に、長谷川泉氏・長野甞一氏編『日本の説話・近代』、志村有弘氏『近代作家と古典』などをも参照させて頂いた。記して謝意を表する。

（昭54・10・10）